ヒマラヤ学誌　*No.15, 23-48, 2014*

第 10 次京大ブータン友好訪問団調査報告

吉原博幸[1)]、加畑理咲子[2)]、谷悠一郎[3)]、西垣昌代[4)]、藤澤道子[5)]、
道和百合[6)]、平田義弘[7)]、小野加奈子[8)]、千石真理[9)]、
丸山晃央[10)]、須永恵美子[11)]

1）京都大学医学部附属病院
2）京都大学医学部（学生）
3）京都大学農学部（学生）
4）京都大学事務部（宇治地区）
5）京都大学東南アジア研究所
6）京都大学医学部附属病院
7）京都大学大学院医学研究科（学生）
8）京都大学医学部附属病院事務部
9）京都大学こころの未来研究センター
10）京都大学大学院農学研究科（学生）
11）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（院生）

2013 年 1 月 18 日から 28 日までの 11 日間、12 名で構成される第 10 次ブータン訪問団としてブータン王国を訪問する貴重な機会を得た。訪問団は、医師 5 名、研究者 2 名、事務職 2 名、学生 3 名で構成された。主たる目的は、ブータン王国の医療を中心とした実地調査、特に、標高 3000 メートルを越える中央部の山村の診療所（BHU: Basic Health Unit）近辺にキャンプを張り、僻地医療の実態の調査と体験を目的とした。初めて訪れる厳冬期の高地であり出発前は相当に心配したが、行ってみると意外に温暖で、村人の暖かい出迎えにも助けられ、快適で充実した調査とブータンの人々との交流を体験する事が出来た。この交流は、その後のブータンからの訪問や、メールなどで現在も続いている。

本報告は、団員で分担執筆とし、ブータンに関するまとまった資料として、後続の訪問団の参考となるよう編纂した。なお、紙面の都合で相当数の写真を割愛せざるを得なかったが、完全版は別途、京都大学ブータン友好プログラム web site <http://www.kyoto-bhutan.org/ja/Himalayan/> で公開予定なので参照していただきたい。

（担当：吉原博幸）

1. 日程

1 月 18 日（金）：日本出発、バンコク泊
1 月 19 日（土）：バンコク発、パロ着、ティンプーへ移動
1 月 20 日（日）：ティンプー観光、病院見学
1 月 21 日（月）：サムテガンへ移動
1 月 22 日（火）：サムテガンにて、BHU または村散策
1 月 23 日（水）：サムテガンにて。BHU・患者の家、寺院・村散策
1 月 24 日（木）：ポプジカへ
1 月 25 日（金）：ワンディポダン、プナカ
1 月 26 日（土）：ティンプー、パロ
1 月 27 日（日）：ブータン（パロ）を発つ
1 月 28 日（月）：関西国際空港到着

＃日程の詳細と写真は、Web 版で公開。
（担当：加畑理咲子、谷悠一郎）

2. 国の概要

【地理と気候】

幸せの国ブータンは、北側を中国（チベット）、南方をインドという 2 つの巨大な国に挟まれた、東西に広がるヒマヤラの山岳地帯に位置する王国である。緯度は、およそ日本の沖縄諸島に相当する北緯 26 度 40 分～ 28 度 15 分、経度は東経 88 度 45 分～ 92 度 10 分の範囲にあり、日本との時差は 3 時間（遅れ）である。

面積は、38,394 平方 km で、スイスとほぼ同じ、ちょうど日本の 10 分の 1 ぐらいの広さで、その 72.5％を森林が占める。南部の山ろくに平らな細い土地がある以外、国土はほとんど山脈の中にある。南北には約 250 km 程度であるが国内の標高差が大きい。インドとの国境近くは海抜 200 m ぐらいであるのに対し、インド国境から北に向かうとすぐに 1,000 m を超えるような高地となり、ヒマラヤ山脈のそびえる北の国境近くは 6,000 m を超えるヒマヤラ山脈の高地となっている。

気候は、標高に応じて大きく異なるが、大ざっぱに分けて 6 ～ 8 月が雨期､9 ～ 5 月が乾期となっている。ティンプー（首都）、パロ、プナカ、トンサなどのブータンの主要な町は、海抜 1,500 m から 3,000 m までの東西に広がる地帯に存在しており、日本とさほど変わらない気温であるが、1 年を通して寒暖の差は激しい。また、標高差による寒暖の変化に加え、山地特有の昼間と夜間との温度差も激しい。日差しが強く、日向と日陰とではかなりの体感温度の差がある。

今回訪問したのは 1 月だったので、乾季に当たり、空には雲一つなかった。日差しは強く、日中は少し歩くと汗ばむくらいの陽気であったが、日が落ちるととたんに冷え込み、夜間は氷点下。1 日の寒暖の差を身を以て体験した。

【民族と言葉】

国の人口は約 72 万人で、東ブータン先住民系（ツァンラ）、チベット系（ンガロップ）、ネパール系（ローツァンパ）､その他の少数民族（ブムタッパ、ケンパ、クルテッパ、ブロックパ、ドヤ、モンパ等）から成っている。それぞれの民族に独自の言語が存在するが、ブータン政府は主に西ブータンで使われていた言語であるゾンカ語を公用語に決めて、国のアイデンティティを保持するためにその普及に力を入れている。しかし、教育の場では初等教育から英語が使われており、英語も公用語となっている。

【国の成り立ち】

チベットからブータンにかけて、7 世紀ごろからチベット仏教のいろいろな宗派が入り乱れて支配していたが、1616 年チベットから亡命したドゥルック派の僧であるンガワン・ナムゲルが、ブータンを政教一致の国家とするための枠組を作ることに成功、1907 年にはブータンの中央に位置するトンサ郡の豪族ウゲン・ワンチュクが、ブータン全土への影響力を強めて世襲藩主に就任し、初代の国王となった。

その後、1952 年に即位した第 3 代国王は、農奴解放、教育の普及などの制度改革を行い、近代化政策を開始、1972 年に 16 歳で即位した第 4 代国王は近代化、民主化路線を継承・発展させ、2006 年 12 月に自ら王位譲渡を宣言し、2007 年 12 月に上院選挙､2008 年 3 月に下院選挙を実施し、ブータンに立憲議会制民主主義を確立させた。2008 年 7 月には、国王の定年制も明記したブータン国憲法を発布、同年 11 月に現第 5 代国王の戴冠式が行われた。

【GNH（Gross National Happiness）と幸せの国】

国の方針として「経済発展による GNP の増大を目指すのではなく、国民全体の幸福を最も重視する」を掲げ、その実現のために 4 つの柱（公平で持続可能な経済発展、環境保護、伝統文化の振興、良い政治）を基に 9 つの指標（精神的幸福、時間の使い方とバランス、文化の多様性、地域の活力、環境の多様性と活力、良い統治、健康、教育、生活水準）を設けている。

農務省、保健省、教育省、通信情報省、建設省、財務省、内務省、貿易産業省、エネルギー水資源省、外務省の 10 ある省の上に GNH 委員会が組織され、国のすべての政策に反映させる仕組みとなっている。

【開発 5 カ年計画】

政府は、開発 5 カ年計画をたてブータンの近代化を進めている。開発 5 カ年計画には政治､経済･産業、教育・文化、医療、通信、国土環境、道路

など、行政のすべての面での発展計画が記述されており、現在は2008年から2013年までの第10次開発5カ年計画が実施されている。

【人々の生活】

ブータン全土は、20のゾンカックという日本の県に相当する地方行政区に分かれていて、それぞれのゾンカックに、たいていひとつのゾン（城）が存在している。ゾンは、以前は軍事的な要塞の役割があったが、現在は宗教的な役割と地方行政の庁舎の役割を持っている。それぞれの村や町のシンボル的な建物で、観光スポットとして人気のあるものが多い。首都ティンプーにある巨大なゾンがタシチョ・ゾンで、ブータン宗教界の最高位であるジュ・ケンポが居住し、国王もそこで執務を行っている。

ブータンの人々はゾン、学校、政府機関、寺院および公的な行事が行われる場所では、男性はゴ、女性はキラという民族服の着用が義務づけられている。さらにゾンに入るときや寺院や役所で高い地位の人に会うときなどは「男性はカムニというスカーフ、女性はラチュという肩掛けを着用しなければならない」という、正装に対する定めがある。一般男性のカムニは白色であるが、王様や法王、修道院長のカムニは黄色、首相はオレンジ、裁判官は緑、地方行政官は白い線が入った赤いカムニなど、厳密ではないが色が社会的な地位を表している。ラチュには男性のカムニと異なり、色による区別はなく、美しい刺繍がなされていて女性のおしゃれのポイントにもなっている。

【ブータンと日本の関係】

1981年に、それまでにブータンについて学術調査・研究を行ってきた人々が中心になり、「日本とブータン間での民間レベルの交流を通じて両国の相互理解を深め、友好親善を促進する」ことを目指し、日本・ブータン友好協会（初代会長桑原武夫京大名誉教授）が設立された。

表1　ブータン王国の概要

面積	38,394　km²（九州とほぼ同じ）
森林地帯	72.50%
人口	約72万人（ブータン政府資料2012年） 都市人口（21%）地方人口（79%）
人口密度	18.75人/ km²
首都	ティンプー（Thimphu）
民族	チベット系、東ブータン先住民、ネパール系等
言語	公用語はゾンカ語（Dzongkha）、英語も広く使われている
宗教	チベット仏教（ドゥク・カギュ派）、ヒンドゥー教
通貨	ニュルタム（NU,Ngultrum）（インド・ルピーと同価）
政体	立憲君主制
元首	ジグミ・ケサル・ナムギャル・ワンチュク国王陛下（第5代）
議会	二院制（上院25議席、下院47議席）
主要産業	農業（米，麦他），林業，電力
国樹	イトスギ（Cupressus torolusa）
国鳥	ワタリガラス（学名 Corvus corax）
国花	ブルーポピー（Meconopsis horridula）
国技	アーチェリー(Archery)
国の動物	ターキン（burdorcas taxicolor）
日本との関係	1986年3月　外交関係樹立。 1988年3月　在大阪ブータン王国名誉領事館設置。 2000年3月　在大阪ブータン王国名誉総領事館となる。 （2003年閉鎖） 2004年12月　在東京ブータン王国名誉領事任命 （2007年2月閉鎖） 2010年4月　在東京ブータン王国名誉総領事館，在大阪ブータン王国名誉領事館，在鹿児島ブータン王国名誉領事館設置。

日本とブータンとの間に正式に国交が樹立されたのは 1986 年である。ブータンの発展を援助するためのボランティアとして、JICA（国際協力機構）から 1988 年から青年海外協力隊（JOCV）が、2001 年からシニア海外ボランティア（SV）が、毎年派遣されている。

2011 年の日本人観光客は 3,943 人で、米国の 6,266 人に次いで第 2 位であったが、2011 年の第 5 代国王夫妻の訪日以降，日本人観光客が急増しており，2012 年 1 月～ 6 月の期間では日本人観光客数が 3,587 名を記録し，外国人観光客数の中で最多となっている。　（担当：西垣昌代）

【参考文献】

1） Lily Wangchhuk: Facts about Bhutan ― The land of the Thunder Dragon　外務省ホームページ：http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/asia.html
2） ブータン王国名誉総領事館：http://bhutan-consulate.org/index.html
3） ブータン政府観光局：http://www.travel-to-bhutan.jp/about_bhutan/media
4） ブータンミュージアム：http://bhutan-npo.asia/

3. 医療

3.1 医療体制

【国家経済と医療】

ブータンの医療は、日本と比較して大変遅れていると言わざるを得ない。それは、両国の経済規模の比較からも容易に理解出来る。日本の GDP 500 兆円と比べるべくもないので、ブータンと同規模の人口（約 70 万人）の島根県と比較してみると、GDP は、島根県が 2 兆 5000 億円、ブータンが 1300 億円。一人当たり GDP は、島根県が 339 万円（日本平均：385 万円）、ブータンは 18 万 7000 円と、約 18 倍の格差がある（表 2）。ブータンの物価は日本の 1/10 と低いので、生活用品についてはそれほどの差はないが、医療器具や薬品は国際的に高価なので、やはり医療環境の整備は困難である。

【医療機関】

ブータンには、いわゆる民間の医療機関は存在しない。すべて国家、自治体（県）が病院などを建設し運営している。医療機関は、大規模～小規模まで、次のような構成となっている。

Referral Hospitals: 3、Dzongkhag Hospitals (Regional, District): 28、Grade I BHUs: 15、BHUs: 163、out-reach clinics: 485

（注）BHU: Basic Health Unit

National referral Hospital はブータンのトップレベルの病院で、首都 Thimphu を初めとして、Mongar 県、Sarpang 県に計 3 カ所、Regional Hospital、District Hospital は県レベルの病院で 28 ヵ所、BHU Grade1 は 15 ヵ所、BHU Grade2 は村単位の診療所で 163 ヵ所設置されている（図 1）。医師が常駐しているのは、District Hospital までで、専門医は Regional Hospital までである。BHU Grade1 にわずかに医師の配置があることもあるが、基本的に BHU には医師はいない。BHU の配下の Out-Reach Clinic が 485 あるが、ここには医師はおろかスタッフさえも居ない。BHU のスタッ

表 2　ブータンと日本の経済規模比較

	ブータン	島根県	東京都
人口（万人）	69.7	73.7	1,323
GDP	1300 億円	2 兆 5000 億円	85 兆 2016 億円
GDP/人	18.7 万円	339 万円	644 万円
人口密度（人/平方キロ）	18	105	6,040

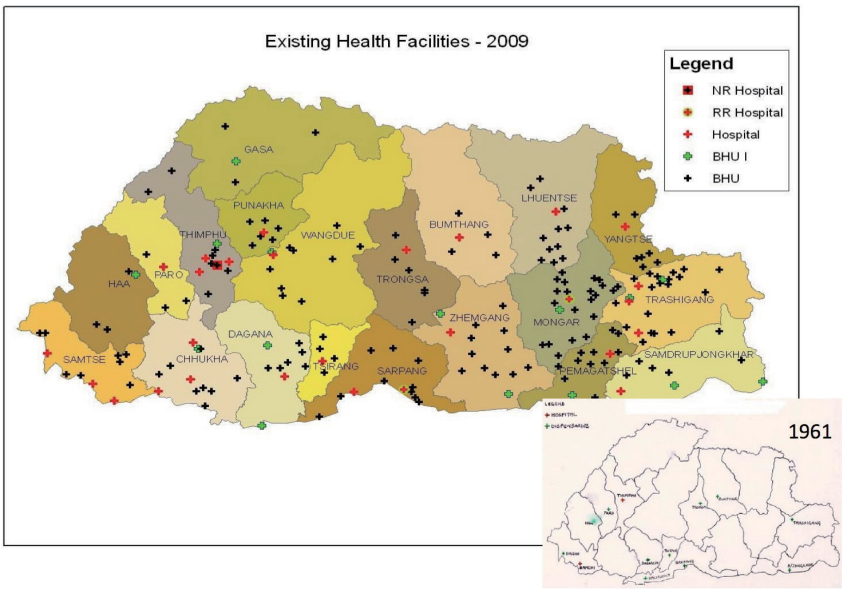

図１　2009 年のブータンの医療機関。1961 年と比較すると飛躍的に整備が進んだ。（出典：Bhutanese Health System, A Summary Overview）

写真１　頻発する狂犬病と咬傷対策のポスター

写真２　サムテガン BHU での外来診療風景（英語／ゾンカ語をナースが通訳）

フが、月1回巡回する運用となっている。

首都ティンプーのReferral Hospitalであるティンプー病院でさえ、CT1台、MRI1台があるのみで、国内の他病院には全くない。ティンプー病院は、病床数350、診療科数20、年間入院患者数11,700、年間延べ外来患者数38万4000、平均在院日数6.4日。ICUはティンプー病院に1施設ある以外、国内には存在しない。心臓外科（冠動脈外科）もなく、狭心症、心筋梗塞などについては主として内科的治療のみを施すことになる。場合によってはタイやインドに救急搬送するしか手段がない（90％がインド、残りがタイ）。海外に送った疾病の上位5疾患は、上から「悪性新生物」「慢性リウマチ性心疾患」「腎不全」「先天性心疾患」「頭部外傷」となっている（2005年の統計）。

BHUには、上級看護師2名、看護師1名、職員1名の合計4名が常駐し、訪れて来る村人達に対する外来診療（聴診、打診、心電図、簡単な処方程度）、受け持ちの村を回る巡回診療などのほか、予防衛生教育を行っている（写真1）。一つのBHUが受け持つ村民は、おおよそ4000名ほどとなる。BHUには、要請に応じて、基幹病院から医師が訪問する。これとは別に、医療支援として京大のチームが年3～4回訪問している。第10次訪問団も、BHUでの外来診療を行った（写真2）。処方箋は、形式は特になく、白紙に走り書きしたような簡単なものである。

【人的資源】

ブータンの医師数（外国人医師も含めて）は全部で181名。人口10万人あたり医師数は2.6人と少ない（日本は人口10万人あたり21人）。産婦人科医は全国で11名。そのうち6名がティンプー病院に勤務している。施設分娩はまたメジャーではないが（施設分娩率70％弱）、年間12000件の施設分娩の1/3がティンプー病院に集まる。正常分娩は看護師のみで対応する。小児科医は全国で7名（日本から派遣の西澤医師を含む）。4名がティンプー病院勤務。NICU担当は西澤医師のみという状況である。2013年度から、京大病院から更に2名の医師と2名の看護師を、東南アジア研究所から産婦人科医師を1名、ティンプー病院に派遣する計画が進んでいる。178のBHUと485のOut-Reach Clinicなどの診療所に勤務するスタッフは、1327名で、一つの診療所あたり2～3名となっている。

医師不足対策として、2013年7月に国立ブータン医科大学が開講した。医学科、看護科、健康科学科の3学科体制。医学科は1学年50人で、うち15名はインドからの学生を受け入れるとのことである（医科大学建設がインドからの資金援助のため）。今後のブータンの医療を支える医療スタッフ育成拠点としておおいに期待されている。（担当：吉原博幸）

【参考文献】

1） Statistical Yearbook of Bhutan 2012: National Statistics Bureau, Royal Government of Bhutan
2） Annual Health Bulletin 2012: Bhutan Health Management Information System, Ministry of Health, Royal Government of Bhutan, Thimphu
3） Bhutanese Health System, A Summary Overview: Policy and Planning Division, Ministry of Health, Bhutan

3.2 高齢者の医療

【はじめに】

高齢になると、程度の大小はあるが誰にでも加齢にともなう何らかの健康不安が生じてくる。そこで高齢者医療では、感染症、高血圧、糖尿病といったような疾患自体も重要だが、それだけでなく高齢者がそれらの疾患をきっかけに、または加齢により、身体機能が低下したり、認知症・抑うつのような精神神経障害をきたすことを重要視する。つまり、そのような機能障害により自立した生活を送れなくなり、社会から脱落してしまわないように予防することが重要となるのだ。

ブータン王国の高齢化率は、現在およそ5％と言われ、わが国のおよそ25％に比べると、ずっと低い。しかし、民主化が進み急速に国が開かれつつあるブータンにとって、わが国における地域の過疎化と高齢化は、他人事ではない。即ち、近代化とともに若者の都会志向が進み、故郷の村を出てティンプーに出て行ってしまう人が増加しているのだ。ブータンの各地域の産業は農業・牧畜が主体であり、若者が村を出て行ってしまうとたちまちその産業の担い手が不足してしまう。ブータン保健省にとっても、いかにして若者に地域に

残ってもらうか、地域を魅力あるものにするかということが課題のひとつとなっている。

【ブータンにおける高齢者医療】

ブータンにおける医療は、前節に述べられている通りであり、医療の最前線は各地域にあるBasic Health Unit（以下 BHU）にゆだねられている。何らかの健康障害が生じるとまず BHU を受診し、そこから必要に応じて病院へ送られるというシステムである。BHU は日本のかかりつけ医的な存在であるが、医師が常駐している BHU はあまり存在していない。多くの BHU には、その地域に多い疾患や母子保健のトレーニングを受けたHealth Assistant（以下 HA）と Basic Health Worker という資格を持った看護師が常駐しており、薬の処方や簡単な医療処置を行っている。BHU は、山岳地帯も含め国の隅々にまで建設されており、ブータン国民の健康が向上していることが、平均余命の延長からも示唆される。それにともない、今後は高齢者医療もブータン医療のなかで重要になってくることが予想される。そこで現在、ブータン保健省と京都大学助教である坂本龍太医師が協力し、高齢者を地域で支えるためのプロジェクトの一環として、各 BHU スタッフに対する高齢者医療に関する教育プログラムが始まっている。

筆者もそのプロジェクトに参加し、2011 年 10 月カリン BHU、2012 年 7 月サムテガン BHU に滞在し、スタッフとともに地域に住む高齢者の健康調査をおこなった。カリンに関しては、坂本医師が長期滞在し地域在住 65 歳以上の高齢者ほぼすべての健康状態が把握されていたため、その際に問題の認められた住民を訪問して経過追跡をおこなった。

【地域で暮らす高齢者】

ブータンは、大家族で暮らし、家族のメンバーがそれぞれ役割を持って、互いに助け合いながら暮らしている。地域から都会に出ている人は実家に仕送りし、その兄弟が生まれ故郷で高齢になった両親・親戚と共に暮らしている。しかし、最近は若者の都会志向が強くなり、地域の過疎化が始まりつつある。カリン・サムテガンにも高齢者の独居世帯や、高齢者のみで住んでいる家が存在していた。

滞在中の印象では、カリンでは健診や BHU 受診の際に、若者が高齢者を連れてくることが多かったが、サムテガンでは、高齢者のみが BHU に来ることがほとんどだった。サムテガンは地形的に平坦で歩きやすいことが理由の一つかもしれないが、高齢者は無視されていると嘆く人もあった。都会に近いところから近代化が進み、地域で支え合う考え方から個人主義的考え方へ変化してきているのかもしれない。

【高齢者の健康問題】

ブータン 2 地域を見てきて、高齢者に多い健康問題として、一つに高血圧があげられる。脳卒中を起こす人もあった。大量の塩分摂取が原因と考えられる。糖尿病はまだ少ないが、大量の炭水化物と少量の副食という食生活と、夜睡眠直前に食事をする生活習慣から増加しているようだ。現在保健省による糖尿病に関するプロジェクトが進行中であると聞く。ただ、しばらく滞在して感じたことには、食生活を変えるのは簡単ではないということである。自炊して現地の人と同様のエマダツィ（唐辛子のチーズ煮込み）やケワダツィ（じゃがいものチーズ煮込み、唐辛子入り）、蛋白質として干し魚（塩辛い）を食べていたが、どうしても塩分が増えてしまう。

また、日常生活機能を障害している大きな原因の一つとしては、痛みがあれば安静にするという習慣だ。カリンでもサムテガンでも、外傷後安静にしていて寝たきりになった、膝が痛くてじっとしていたら歩けなくなった、腰痛がひどくなり歩けなくなった等の廃用性身体機能障害の人に出会った。カリンの骨折後寝たきりになった女性に、坂本医師たちが運動療法の重要性を伝えたところ、次の訪問時には杖をついて歩けるようになっていたということもあった。ブータンでは、年を取ると弱っていくことが当たり前であり、トレーニングすればある程度予防できるということはまだあまり知られていないようだ。また、高齢者の痛みは安静を要するものと要しないものがあるということは認識されていないようだ。

【今後の展望】

これまで、地域の BHU スタッフは、母子保健や感染症対策を主体にトレーニングを受け、医療をおこなっていた。今後は地域に高齢者の割合が増加す

ることが予想されるため、高齢になっても自立した生活ができることが新たに重要となってくる。

現在、ブータン各地では、各自の健康状態を把握するため、高齢者を対象とした健康診断プロジェクトが始まっている。しかし、とらえた健康問題をどのように評価し、どのような介入をしていけばいいのかということがもっとも重要であり、まだ道は始まったばかりである。今後我が国でのノウハウをいかしながら現地医療スタッフと協力し、ブータン高齢者の健康にかかわっていく所存である。（担当：藤澤道子）

3.3 新生児医療、母子保健、予防接種

【はじめに】

ブータンは 2008 年に制定されたブータン王国憲法第 9 条に「国により、現代及び伝統双方の医療上において、公共医療のための基本施設の無償利用が提供され得なければならない。」[1] と明言されているように医療費は基本的に無料である。ここでは私の専門である母子保健と新生児医療について文献資料やウェブサイトの情報、当該地での見聞も踏まえて論考する。

【母子保健事業】

1960 年代に医療の近代化が始まり、健康指標の改善を目指してまず力を注がれたのが母子保健事業である。ブータンではそれまでは助産師などの専門職者が立ち会わない自宅分娩が主流であり、1950-55 年の乳児死亡率は 1000 出生対 184.8 であり、平均寿命は 36.1 歳だった[2]。Basic Health Unit（BHU）や病院などでの施設分娩件数の増加、出生直後から始まる予防接種、栄養・衛生状態の改善により、2005-10 年の乳児死亡率は 1000 出生対 44.4、平均寿命は 65.8 歳にまで改善した。予防接種啓発ポスターによると、出生後すぐから BCG、経口ポリオ生ワクチン、B 型肝炎を開始し、その後、ジフテリア、破傷風、百日咳、インフルエンザ桿菌、麻疹、風疹、ヒトパピローマウイルスが無償で提供されている（写真 3）。狂犬病に関してはワクチンが不足しており感染動物と接触しないよう注意喚起のポスターが掲示されていた。

また、母子の健康と福祉の増進を目的として、家族計画が推進されており、その結果、合計特殊出生率は 6.67 から 2.61 と女性 1 人が出産する子供の数は約 1/3 まで低下していた。

【母乳育児】

筆者は母乳育児支援に関心があり、Jigme Dorji Wanchuck National Referral Hospital（JDWNRH）や BHU 見学時、母乳育児を訴えるポスターや写真が目に付いた（写真 4）。

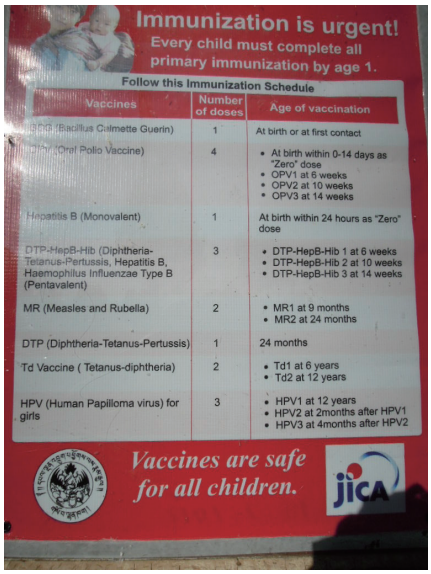

写真 3　BHU の予防接種啓発ポスター。ワクチンの種類と接種時期がまとめられている。

写真 4　各地の BHU に飾られていた授乳婦の写真

街で売られている粉ミルクも「母乳代用品のマーケティングに関する国際基準（以下国際基準と略す）」[3] を遵守したものだった。日本も国際基準を承認しているが、実際には多くの母乳代用品や販売促進事業が国際基準に違反している。ブータンで国際基準が遵守されている背景として重要なことは、安全な水の確保は80%にとどまり[4]、どこでも安全な水が手に入るとは限らないということである。そのため日本で本来は不適切な行為ではあるが多くの施設で行われている糖水の補足は基本的に行われていない[5]。実際、地方や移動中、屋外の黒い大きなタンクに雨水を貯水している光景を目にし、また現地の人々でも生水は飲まないという。水とトイレの衛生管理は保健省の公衆衛生の課題の一つにも挙げられており[6]、サムテガンのキャンプ地の民家のトイレは地面に穴を掘って板を張り板とトタンで壁と屋根をつけたものだった。これは田舎では一般的な様式のようである。このような衛生環境であるため、母乳育児は乳児死亡率を下げる最善の策であり、乳幼児と経産婦の健康を守るうえでも重要な栄養法といえる。

2010年のUNICEFと保健省の合同調査[7]では、何らかの形で少しでも母乳で育てられたことのある児が全体の98.9%を占める一方で0-5か月児の完全母乳率は48.7%、6か月未満の混合栄養（母乳優位）は66.8%であった。完全母乳率は都市部の方が地方より高く（57.4%対44.5%）、母親の学歴が高いほど高く（教育歴なし44.4%、2次教育57.3%）、富裕層の方が貧困層よりも高い（貧困層36.1%、富裕層65.0%）傾向があった。その一方で瓶哺乳は都市部の（都市部18.4%、地方8.5%）高学歴（教育歴なし7.4%、2次教育21.3%）で裕福な家庭（貧困層4.7%、富裕層23.2%）ほど割合が高かった。これらの理由については言及されていないが、地方の慣習や哺乳瓶への誤った認識が影響しているのかもしれないと西澤氏は推察している[8]。サムテガンのhealth assistant（HA）の話では、今後、産後休暇が現在の3カ月から6カ月に延長されるとのことだった。この政策によりWHOの「乳幼児の栄養に関する世界的な運動戦略」の中の「生後6カ月間は母乳だけで育てる」ことが容易になり、完全母乳率が上昇し母子の健康状態が向上することが期待される。

【新生児医療とfamily centered care】

1960年代の医療の近代化当初、小児医療は主にインドからの招聘外国人医師・医療従事者によって提供されていた。2012年1月現在、8人の小児科医が診療に従事し、そのうち4名がJDWNRHに所属し、残りの4名は基幹病院に1名ずつ所属している[9]。ブータン国内の年間の出生数は15,000人（2005-10年）[2]であり、施設分娩率は69.5%、JDWNRHの分娩件数は3500件に達するという。独立した新生児集中治療室（NICU）は全国でJDWNRH1か所のみであり、年間の入院数は約1000人、その半数は新生児黄疸の治療である。ブータン人も日本人同様新生児黄疸になりやすいらしい（新生児黄疸の頻度は人種差があり東アジアの民族は多いがヨーロッパ系の民族では少ない）。地方の病院やBHUには血清ビリルビン測定器や経皮ビリルビン測定器がないため視診による診断に頼っており、退院前の親に新生児黄疸の見分け方を教えているということである[10]。実際サムテガンのBHUにも生後20日くらいの新生児を連れた家族がやってきて黄疸について相談され、筆者も掌を診て重症の黄疸か否か判断せざるを得なかった。

JDWNRHの新生児病棟は全部で25床あり、そのうち集中治療を要する児のためのNICUは5床である。25床に看護師の定数は12名であり、24時間手厚い看護を実施するのは至難の業で、児の状態が落ち着いている場合は、授乳やオムツ交換、清拭などは、すべて付き添いの両親の役目となっている[10]。交通や地理的な事情で家族は面会に通うことが難しいこともあり、病棟内に設けられた入院時の母親のためのベッドに泊まり込み、必然的に両親が医療に参加し、家族中心の医療となっている。このような家族中心の医療をfamily centered care（家族中心型の医療）と呼び、北欧から世界に広まってきている。今まで家族から赤ちゃんを切り離してきたことが親子関係の形成、母乳育児、児の発達といったことに悪影響を及ぼしてきたという反省から日本でも注目され広まりつつある。「母子分離が当たり前」でないブータンの新生児病棟は、文化的に親戚・家族の絆が強いブータン人にうまく受け入れられ、結果的に「母

子分離が当たり前」の日本で変えることが難しい family centered care を実現できているように感じた。

（担当：道和百合）

【参考文献】

1） The constitution on the Kingdom of Bhutan. World Intellectual Property Organization. http://www.wipo.int/wipolex/en/text.jsp?file_id=167955（2013 年 4 月 18 日検索）

2） United Nations, Department if Economic and Social Affairs. Population Division, Population Estimates and Projection Section. http://esa.un.org/unpd/wpp/unpp/p2k0data.asp（2013 年 4 月 28 日検索）

3） Annelies Allain, Andy Chelty 著，円谷公美恵，本郷寛子ら翻訳．乳児の健康を守るためにWHO「国際基準」実践ガイドブック　保険従事者のための「母乳代用品のマーケティングに関する国際基準」入門．日本ラクテーションコンサルタント協会．2007.

4） WHO Bhutan Health Information Water & Sanitation. WHO Country of Bhutan. http://www.whobhutan.org/en/Section4_26.htm（2013 年 4 月 18 日検索）

5） Dolma．幸せの国？ブータン．http://ameblo.jp/dolma/（2013 年 4 月 13 日検索）

6） Public health engineering Division, Department of public health, Ministry of health. http://www.health.gov.bt/（2013 年 4 月 15 日検索）

7） Bhutan Multiple Indicator Survey 2010. National Statistics Bureau, UNICEF and UNFPA (2011) http://aidsdatahub.org/en/reference-librarycols2/item/23816-bhutan-multiple-indicatorsurvey-2010-national-statistics-bureau-unicef-and-unfpa-2011（2013 年 5 月 7 日検索）

8） 西澤和子．新生児科医師，雷龍の国へ　幸せの国ブータンで赤ちゃんとともに生きる．*Neonatal Care*. 25:620-621:2012

9） 西澤和子．ブータン王国における新生児医療の現状と課題―重症新生児 3 例の治療経験を通して―．ヒマラヤ学誌．13:254-266:2012

10） 西澤和子．新生児科医師，雷龍の国へ　幸せの国ブータンで赤ちゃんとともに生きる．*Neonatal Care*. 25:850-851:2012

3.4 小児外科、一般外科

【一般外科】

ブータンでの一般の医療の入り口は Basic Health Unit（BHU）である。日本ではいわゆる診療所に相当するが、基本的に医師が在駐しない。ある BHU における受診疾患の上位 10 は以下の通りである。1. 感冒（風邪）、2. 神経障害、四肢の運動障害、3. 皮膚の感染症、4. 下痢と赤痢、5. 胃潰瘍症候群、6. 筋肉・骨の障害、7. その他の消化器疾患、8. 目の障害、9. 作業に伴う傷害（切り傷・擦り傷等）、10. 高血圧、である。この中で外科関連疾患は 2、5、6、9 である。

私がサムテガンで経験した患者の一人を提示する。60 代女性。主訴は膝の痛みおよび膝の可動域制限による歩行障害である。サムテガン BHU から悪路を車で 30 分、そこからさらに山道を 15 分程歩いたところに住んでいた。膝の痛みに対して以前 needle therapy を受けたがあまり効果がなかったという事であった。Needle therapy とは、日本でいう針治療ではなく、先が鈍になっている針をアルコールランプで暖め、皮膚に数カ所当てるという治療で、お灸に近い。その後も痛みが有るため家からほとんど出ず生活していたということである。訪問時には、脚を 90 度に曲げて体の前においた状態、いわゆる体育座りの状態で生活していた。ある程度の屈曲、伸展は可能であるが、完全に伸展する事は出来ず、歩行は不可能であった。痛みのために膝を動かさず同じ姿勢でいたために膝関節の拘縮を来していた。治療はリハビリであり、日本ではリハビリセンターに通院してと言う事になるが、BHU にはそのような機能はなく、自宅でリハビリを頑張ってもらうしか無い。また、リハビリ医の往診も、依頼して今月来れるかどうか、来月、再来月になるかもしれない、という感じである。

しかし、重要なのはブータンでは家族の介助が十分に有り、おそらく本人はそこまで不自由を感じていないという事である。日本であればいくら良い手術を受けてリハビリで回復しても、以前より生活が不自由だ、こういう事が出来なくなった、という不満の声が多く聞かれる。また、欧米ではこんな投薬、手術が出来るのに日本では出来ない

等日本で出来る治療に対する不満の声も聞かれる。しかし、ブータンではそこで受けられる治療、家族のサポートで満足し幸せに生活しているのである。このあたりが国民総幸福度に貢献していると考えられる。

作業中の傷害であるが、サムテガン BHU では縫合の道具も無く、抗生剤もペニシリンのみという状況である。BHU 見学の際に来院した老人で、左下腿に 15 cm 程の切創後の瘢痕を認めた患者がいた。傷について尋ねた所、昔農耕具で足を切ったが自然に治った、と言っていた。現代の日本では、明らかに縫合不要である小さな傷でも病院を受診する人を多数認めるが、ブータンでは昔の日本のように、“つばを付ければ治る”的な感覚の人が未だ多いのではないだろうか。

その他外科に関係する病気としては胃潰瘍の人数が比較的多い事である。先進国に比べ発展途上国ではピロリ菌の感染率が高いことが報告されており、ブータンにおけるピロリ菌の感染率は正確にはわからないが、診療所のデータを見る限りでは感染率は相当高いと考えられる。

最も我々が驚かされたのは避妊方法である。コンドームは基本で BHU にて配布されていたが、外科的アプローチによる避妊がコンドームとほぼ同等に扱われていた。外科的避妊というのは、女性では卵管結紮術、男性では精管結紮術である。手術を受けた年齢や子供の有無等は不明であるが、約 4000 人の村で卵管結紮術は年間約 40 例、精管結紮術は約 100 例施行されていた。日本では、外科的アプローチは保健適応になっていないこともありあまり一般的ではない。男性の精管結紮術は一般的にパイプカットと言われており、精管が体表に近いところを走っているため、局所麻酔、半身麻酔で施行され、比較的低侵襲で施行可能である。しかし、女性の卵管結紮術は卵管が腹腔内に存在し、開腹手術が必要となるため、侵襲が男性に比べると大きくなってしまう。開腹でなく、膣からのアプローチもあるが、開腹と比べると難易度も高い。ブータンでどちらが施行されているかは私が調べた限りでは不明であるが、おそらく開腹手術と思われる。国の政策として人口のコントロールが行われており、また、医療費は全て国の負担であるため外科的な避妊が積極的に施行可能なのであろう。

【小児外科】

小児外科というと子供の外科、という漠然としたイメージはあるものの、具体的にどういう病気を治療しているかというと答えられる人は少ないのではないだろうか。鼠径ヘルニア（脱腸）、陰嚢水腫、臍ヘルニア（でべそ）が代表的な疾患で、これらで小児外科の手術症例の約半数を占める。それ以外に小児外科で扱う疾患として停留精巣、鎖肛、Hirschsprung 病、リンパ管腫、胆道閉鎖症、胆道拡張症、膀胱尿道逆流症等が有る。また、新生児期に手術が必要な疾患として食道閉鎖症、十二指腸閉鎖症、小腸閉鎖症、腹壁破裂、横隔膜ヘルニア等がある。基本的には先天的な異常により起こる疾患が大多数である。その他悪性新生物（神経芽腫、肝芽種、腎芽腫等）も認めるが、成人の悪性新生物（胃癌、大腸癌、肺癌、乳癌等）と比較すると数は非常に少ない。

ブータンの年間出生数は人口 70 万人に対して約 14000 であり、日本の 2 ～ 3 倍の出生率である（人口 1 億 2 千万に対し出生約 100 万、島根県が人口約 70 万人でほぼ同じであるが、出生は約 7000）。島根県で施行されている小児外科手術は約 400 例あり、単純に計算すると倍の 800 例が年間手術を必要としている。小児外科疾患は患者がいきなり小児外科を受診するのではなく、まずは小児科を受診し、小児科医が疑わしい患者を小児外科医に紹介し、小児外科医が治療するという形態をとる。このため、小児外科の充実のためには小児外科医が多くいる必要はなく、小児科の充実、レベルアップがまず必須である。ブータン国内に小児外科医は 2 人、小児科医が 8 人と絶対的な数が不足している。小児外科の充実のためには小児外科医の補充も重要だが、小児科医の補充がより急務である。

ブータンにおける患者搬送の問題もある。112 で救急車を呼ぶ事はできるが、我々が訪れたサムテガンでは救急車を呼べるようになったのは昨年である。高山の中にある国でトンネルはなく、道路はたいがい曲がりくねっている。メインの道路は舗装されており、搬送には問題ない。しかし、メインの道路から少し外れるとほとんどが未舗装の道路となり、bumpy であるため救急車内で何か治療を行うのはまず不可能と思われる。また、未舗装の道路は雨期になるとぬかるんで車通れなく

なり、患者搬送は不可能となる。更に奥地に行くと車も入れなくなり、家に辿り着くには獣道のような細い道を数時間、下手したら数日歩かねばならない所もまだまだ沢山ある。医療そのもの以外にも課題は山積みである。（担当：平田義弘）

4. 教育　―教育プロセスの観点から　医学を例として―

【はじめに】

2013 年 1 月、筆者は、京都大学ブータン友好プログラム第 10 次訪問団の一員としてブータンを訪れた。本訪問の少なからぬ意義は、ブータン王立大学（Royal University of Bhutan）にブータンで初の医学部が設置されるにあたり、本学との交流を目的とし、保健省及びティンプー王立病院の幹部と京都大学訪問団との会合が開かれたことにあるであろう。本会合では、ブータン保健省によるブータンの医療の現状報告、また、本学医学部附属病院・医療情報企画部の吉原教授による医療情報システムについての報告があった。ブータン保健省によると、現時点でのブータンの医師数は 181 名、内専門医 expats が 35 名、およそ 72 万人の人口で 10.000 人に対して医師が僅か 2.6 名という医師不足が指摘され、医師の養成は喫急の課題であるとの印象を受けた。ブータンでは現在、インドやスリランカの大学の医学部で学んだ医師が帰国して医療を行っている。今後、伝統医学と近代医学が融合されたブータン独自の医学教育体制の構築が期待されている。ところで、医学部は高等・専門教育に位置付けられるものであるが、高等･専門教育機関を設置するにあたっては、初等、中等を含む教育プロセスの包括的な検討が不可欠であると筆者は考える。そこで本稿は、ブータンの教育に関心を置き、本邦での先行研究を考察する。そのうえで、初・中・高等教育ならびに専門教育という教育プロセスの観点から、ブータンの教育の特徴及び問題点を俯瞰的に捉え直したい。

【先行研究】

ブータンの教育の先行研究として、平山（2009, 2012）、杉本（2013）を挙げる。平山（2009）によると、ブータンの教育の近代化は、インドによる財政面、政策面での大きな支援を受けて、1961 年の第 1 次 5 カ年計画に始まった。その後 1987 年には、初等教育の普及の為に遠隔地にコミュニティースクールが設置される。それと同時に、理科、社会、道徳等の内容を包含した「環境教育」と呼ばれる NAPE プログラム（New Approach to Primary Education）が導入される。2002 年に教育制度が改編され､現在は 1-6-2-2-2 制をとっている。第 6 学年までの小学校 Primary School、第 8 学年までの小中学校（Lower Secondary School）、第 10 学年までの中学校（Middle Secondary School）、第 12 学年までの高校（Higher　Secondary School）である。1961 年の第 1 次五カ年計画当初 0.2％であった初等教育就学率は 87.4％（2009 年）（参考情報 1）にまで向上した。一方で平山（2009）は、ブータンの初等教育達成の目標には統一感が欠如していると問題点を指摘している。また、平山をはじめブータンの教育制度に関する先行研究の多くは、主に初等教育政策について論じており、中等・高等教育の研究、或いは僧院教育等ブータンの伝統的な教育機関に関する研究は豊富とはいえない。実際、初等教育の就学率は向上している一方で、やや古いデータではあるが、初・中・高等教育の純就学率は、33％（2001 年）と低い水準になっている（参考情報 2）。

次に、杉本（2013）は、ブータンの教育内容の研究を行っている。ブータンの国家政策の大きな特徴は､経済発展による物質的な豊かさではなく、精神的な豊かさを追求する「国民総幸福論 GNH（Gross National Happiness）」を掲げる開発計画である。GNH は、公正で持続可能な社会経済発展、環境保全、文化遺産の保存と促進、優れた統治を柱とし、実務委員会における審議を通して、その理念を政治、経済、社会に浸透させることを図るものである。なかでも教育は、GNH を実現する具体策として位置付けられ、国家の幸福を構成する重要なファクターとして捉えられている（杉本、2013）。杉本は、GNH における教育の役割について言及し､「幸福度」調査を行っている。ブータンでは授業科目だけでなくすべての学校生活の側面において、幸福の理念が追求され、それは主に仏教の概念に見いだされるという｡「価値教育」は、1999 年に初等教育に導入され、週 1 時間の授業で愛情、思慮、尊敬、友好等、学年ごとに徳目が設定された（平山、2009）。筆者が訪れたサムテガンにある中学校の寮のカリキュラムには、

Meditation（瞑想）と記載されていた。それからは、中等教育の寮生活においても仏教教育が施されていることがうかがえる。一方で杉本は、近代教育の発展が若者の幸福に結びつくという点においては、その調査から、疑問符を投げている。若者の幸福感は、伝統的な僧院での教育観に裏付けされたといえる。しかし、教育の近代化、国際化は、それに社会構造が追いついていない現状において、高学歴の卒業者の失業を生み、若者に挫折感を与えることになるという（杉本、2013）。

【考察】

以上の先行研究の考察より、ブータンの教育の問題点がうかがえる。それは、その政策において、初等教育から高等教育までの教育プロセス、及びその課題へのビジョンが不十分であることといえよう。また、僧院教育等の伝統教育、あるいは、例えば農業や工業などの近代的な職業教育の位置づけが明確とはいえない。杉本の調査の、高学歴になるにつれ幸福度が下がるという研究は印象深い。「幸福度」の基本にある仏教の価値教育は、人格形成に寄与する初等・中等教育とは親和性を持ち得るが、高度な知識や技術の習得を目的とした高等教育に「幸福度」は結びつき難いのであろうか。初等教育の就学率が100％に近づく今日、ブータンの教育は、中等・高等教育、さらにその後の社会への接続を見据えることが不可欠である。そして特に、高等教育、専門教育の普及、またその中で独自のGNHの理念を生かすことこそが求められているのではないか。

例として、本訪問の第一の関心である医学教育においては、医学部設置にあたり、医療を中心としたブータンの福祉社会全体を捉えなければならない。医療には、医師だけでなく看護師、薬剤師、放射線技師等、医療職の包括的な養成が不可欠である。本訪問では、サムテガンを中心にBHU（Basic Healthcare Unit）とよばれる各地域の診療所を訪ね、ブータンの医療システムについて知見を深めた。BHUには、ヘルス・アシスタント（Health Assistant）が配置され、初期診療にあたる。近代的な医療に精通したヘルス・アシスタントの養成と増員が求められる。そして、医師と医療職の養成の先にある、医療・福祉分野の就業環境の充実化は、大学での医学教育の実施と同時に必要であろう。このように、高等教育を受けた者の社会での活躍の場を考慮した教育体制の整備は、公正で持続可能な社会経済の発展というGNHの理念に繋がるものである。そのためには、伝統的な生活と地域の多様性を認めたうえで、教育と産業、すなわち教育機関の卒業者と就業人口を構造的に捉えた政策を実施し、職業意識を高め技能を伝達するキャリア教育を普及させる必要がある。さらに、より高度な専門教育にあたっては、組織は細分化されるであろう。

以上、本訪問で得られた知見により、ブータンの教育に関する先行研究を鑑み、教育プロセスという観点から、ブータンの教育を考察した。初等教育の達成は、開発途上国であるブータンにとって、基礎的な課題であることには間違いない。しかし、GNHという画期的な開発理念は、中等・高等教育、専門教育という教育プロセスのビジョンなかで、その意義を増すのではないかと考える。確かに、ブータンの産業の近代化が教育の発展に追いついていない現在、一貫した教育政策の実現は容易なことではない。しかし、近代的教育の発展と独自の価値教育を尊重する「幸福」が矛盾なく、持続的に実現されるとはすなわち、社会と接続した教育のあり方を模索し、高等教育及び、専門教育の成果をより具体的な形で社会に還元させることであろう。今回のブータン王立大学の「医学部」の設置が、医療・福祉分野でのその一つの布石になることを期待する。（担当：小野加奈子）

【参考文献・参考情報】

1）外務省　政府開発援助ODA　国別・地域別政策情報　http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/kuni/06_databook/pdfs/02-06.pdf

2）外務省　政府開発援助（ODA）国別データブック 2006　http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/kuni/06_databook/index.html#II

3）杉本均（2013）「ブータンの子どもたちの『幸福度』と教育」（教育と医学の会『教育と医学』第61巻1号）pp.12-19

4）平山雄大（2009）「ブータンにおける近代学校教育の特質とその課題（早稲田大学教育学会『早稲田大学教育学会紀要』）」pp.132-139

5）平山雄大（2012）「日本におけるブータン教育研究の現状と課題　―先行研究三類型―」

（早稲田大学教育学会『早稲田大学教育学会紀要』第 13 号）pp.135-142

5. ブータンの宗教―チベット仏教が紡ぎだす絆とつながりの死生観―

【はじめに】

ブータンは仏教国である。子供でさえも、生まれてきた目的は執着を捨て、涅槃に入ることであると、躊躇なく答える。本論では僧籍を持つ筆者が、仏教徒としての視点で、ブータンの宗教について報告する。

【背景と概要】

ブータン人が信仰しているのは、チベットから渡来した密教である。2500 年前にインドで釈迦牟尼仏によって確立された仏教がチベットへ伝わり、土着文化と融合し変化をとげ、さらにブータンに流れて定着した。チベット研究家で、かつてブータン王立図書館の顧問であった今枝由郎氏が著した「ブータン―変貌するヒマラヤの仏教王国」によると、19 世紀までのブータンの歴史は、即仏教の歴史だという。ブータンに仏教を伝えたのはチベット僧であり、チベット文化圏に仏教が最初に伝わったのは、ソンチェン・ガンポ王が国家を統一して、古代チベット王国を建国した 7 世紀前半のことである。8 世紀後半、チベットのチソン・デツェン王が仏教を国教と定め、インドで密教の修業をしたパドマサンバヴァ（蓮の中から生まれた人という意味）を迎えたことによって、チベットに密教が一気に広まった。このパドマサンバヴァによってチベットに伝えられた密教は、ヒンドゥー教との融合が進み、タントラの特色が強い、インドの後期大乗仏教の流れを引くものであった。タントラとはヒンドゥー教の秘儀聖典のことであり、インド後期密教のタントラとは、古代インド人の民間信仰、占星術、巫術、祭式、医学、薬学、天文学、錬金術を包括している。インドから受けついだチベット仏教は、このようなタントラの特徴の濃いものであった。チベットの土着の信仰で、アニミズム、シャーマニズムのボン教と習合し、民衆の間で仏教が広く受け入れられるようになっていった。ブータンの民家の壁などに描かれているポーと呼ばれる男根の絵には、子宝に恵まれたり、魔除けの力があるというが、8 世紀後半以降のブータンでは、このような土着の信仰と融合しながら、チベット仏教がゆるやかに民衆に浸透していったようだ。十一世紀前半に、チベット仏教の、カーギュ派の一派、ドウック派の高僧、ンガワン・ナムゲルはチベット王との関係が悪化したためブータンに亡命し、彼を迎えたブータンのドウック派は国内を統一した。二十世紀初頭に世襲王政が打ち立てられるまで、ドウック派の政教一体制国家としてのブータンが確立され、国の最高権威者として、ンガワン・ナムゲルの生まれ変わりが、歴代就任していた。その一方で、八世紀にパドマサンバヴァによって始められたニンマ派の僧たちもブータンで布教し、多くの寺院を建立した。ブータンではニンマ派は古派、それ以降に興った宗派は新派と呼ばれている。ブータン人の国教はドウック派であるが、信者数が一番多いのはパドマサンバヴァによって伝えられたニンマ派である。開祖、パドマサンバヴァはグル・リンポチェとも呼ばれ、ブータンの寺院や民家のほとんどの祭壇で、その像が信奉されている。ちなみに、「グル」は師や先生、「リンポチェ」とは尊いもの、宝、という意味だという。

同じく、祭壇や画像でよくみかけるのが、グレーの長いあごひげが特徴のシャプドウン・リンポチェだ。シャプドウンは、ブータンに亡命してきたドウック派のンガワン・ナムゲルの称号である。この他、ブータン仏教では、様々な神仏が寺院に祀られ、崇められている。日本でもお馴染みなのは、シャキャムニ（釈迦牟尼仏）、アヴァロキテシュヴァラ（観音菩薩）マンジュシュリ（文殊菩薩）アチャラナータ（不動明王）等であるが、ターラと呼ばれる女神も篤く信仰されている。ターラはチベットのソンチェン・ガンポ王の二人の妃を象徴しているともいわれ、全身緑色のグリーンターラはネパール人の妃を、全身白色のホワイトターラは中国人の妃を表しているという。

チベット仏教の特徴として忘れてはならないのが、チベットとブータンで深く信じられ、崇められている活仏、あるいは化身と呼ばれる存在である。化身とは、生まれ変わりを繰り返して、悩み苦しむ人たちを悟りへと導く高僧である。化身の中で、最も有名なのが観音菩薩の化身とされ、現在十四回目の転生をしているダライ・ラマであろう。ブータンにも現在、化身として認められてい

る高僧が百人あまりいるという。輪廻転生思想は、チベット仏教において、非常に重要である。仏教では、「六道輪廻」の思想があり、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上の六つの世界を、生前の行いに応じて生まれ変わると信じられている（写真5）。この六つの迷いの世界から解脱しない限りは、輪廻のサイクルから抜け出すことができず、悟りを開き、仏になることによって、この苦しみから離れられる。その方法を説くのが仏教である。化身の場合は、解脱することができるにも関わらず、この世の人々を見捨てることができず、あえて輪廻を繰り返すため、ブータンでも篤い信仰を集めている。最新ファッションに夢中なブータンの現代っ子さえも、まるでロックコンサートに出かけるように熱狂して、化身の法要に参加するという話からも、ブータン人にとっての化身への崇拝ぶりがうかがえるというものだ。

【暮らしに息づいたブータン人の仏教】

ブータン人は、寺院や記念碑で、マニ車を回しながら、「オン・マニ・ペメホム・・・」と真言を称え、一切衆生、生きとし生けるものの幸福と解脱を祈る。宇宙も自然も、人間も、動物も、一切の生きものが繋がって生きていて、切り離しては生きていくことができない。これを仏教用語では「縁起」という。すべての存在、現象はお互いに依存しあい、関連しあって今、ここにある、ということだ。縁起ということを意識すると、例えば肉を食べる人間は、生命を維持するために肉が必要なのだが、食べられる動物の立場を思うことになる。人間は自分の欲望を満たすだけでは幸せにはなれない。ブータン人はこのことを心より頷いているから、生きとし生きるもの全て、一切衆生のために祈る。みんなの幸せが自分の幸せである。みんなのために祈るからこそ、幸せなのだ。各家庭には必ず仏壇があり、大人が仏陀を敬う姿を子供や孫に見せ、教えを伝えている。

写真5　プナカゾンの六道輪廻マンダラ

驚いたことに、ブータンにはお墓がないという。死後49日で、故人は違う生命へと生まれ変わるので、必要がないのだそうだ。火葬した灰の一部を固めて、小さなお地蔵さんのような人型にして祀ってあるのを村や峠で見かけることはあるが、灰は山等でまかれ、自然に還す。東部のある村では、遺体を百八つに刻み、川に流し、魚に与えるという。浄土真宗の開祖親鸞は、自分の遺体を鴨川に流し、魚のエサにしてくれと、遺言している。これまで多くの生き物の生命をもらってきたからこそ、生きてこられた。その、せめてもの恩返しだというのだが、ブータンでも同様の考えであろう。筆者は僧侶として、病院チャプレンとして、日米で働いた経験があるが、死を恐れ、自分の生命の最後に向き合うことを拒否する日本人があまりに多いと感じている。生まれた限りは必ず死ぬ定めであるというのに、死を医療の敗北にしかすぎないと思っている医師が、ホスピスにさえ存在する。ブータン人は穏やかだが、犯しがたい威厳があると、前述の今枝氏をはじめ、多くの人が語る。それは、目の前の欲求に翻弄されがちな人間の自性を仏教の教えで律しながら、今世を生き抜き、命果てても、更なる世界が広がるという死生観に支えられているからではないだろうか。日本は今、孤立・無縁社会といわれるが、不安で寂しい毎日も、仏の慈悲に抱かれ、生きとし生けるものとのつながりの中にこそ生かされていると気づくと、他者との絆が深まり、大きな安らぎへと転

じられる。

近代化の波が押し寄せる中で、今後ブータン人の精神性にどのような影響があるか心配なところであるが、西洋的個人主義に限界が来ていると気づいている人たちにとって、ブータン人の生き方と、国民総幸福量は、大いに関心の対象であろう。しかし、仏教思想とその実践なしではブータン人の幸福はあり得ず、ブータンを通してでも、仏教の素晴らしさに多くの人たちが気づいてくれることを、筆者は切に期待するのである。

（担当：千石真理）

【参考文献】

1） 今枝由郎,「ブータン―変貌するヒマラヤの仏教王国」大東出版社，1994 年
2） 今枝由郎,「ブータンに魅せられて」岩波新書，2008 年
3） 五木寛之,「百寺巡礼　海外版　ブータン」講談社，2011 年
4） 高野秀行,「未来国家ブータン」集英社，2012 年
5） 御手洗瑞子,「ブータン、これでいいのだ」新潮社，2012 年
6） 地球の歩き方，ブータン 2012 ～ 2013 年版 ダイヤモンド社，2012 年

6. 交通

【概要】

本項ではブータン国における交通について説明する。ブータンの国内交通は鉄道がないため、自動車もしくはバスによって輸送が行われる。

ブータンの道路事情については次のような特徴が挙げられる。まず、山がちな国ではあるが、山は神聖なものであるためトンネルが掘れない。そのため、都市間の道路は曲がりくねった道で 3000 m 近い標高を物峠をいくつも超えるものとなっている。また、アスファルトによる舗装も、一部の都市やティンプー～パロ間のハイウェイを除いてはあまりされておらず、ほとんどが未舗装の道路である。

ブータンの道路は、東西を結ぶ幹線道路があり、そこから枝分かれしている道路を利用することでほかの都市に移動するという形になっている。このため、道路はネットワーク化されているといえない。未舗装であることも相まって、ブータンの道路事情はあまりよいものとはいえず、国内の移動には多大な時間がかかる状況である。

本項では、以下、航空機･バス･タクシーといった公共交通機関、そして自家用車についてブータン国の交通の現状について記していく。

【航空機】

ブータンに乗り入れる飛行機は国営のドゥルク・エアーのみである。このほか、2011 年より国内線が就航して、かつては移動に時間がかかった東部への移動が便利になった。

ブータンの空の玄関口は西部にあるパロのパロ国際空港であり、現在すべての国際線はこのパロ国際空港に到着する。

【国内航空】

国内線としては現在ドゥルク・エアーがパロ～ブムタン間を週に 2 本、パロ～ヨンプラ間を週に 1 本設定して運行を行っている。

【国際航空】

国際線は、現在ドゥルク・エアーのみが運航しており、デリー・ガヤ・グワハーティー・バグドグラ・コルカタ・ダッカ・バンコクに就航している。パロ空港はパイロットが自らの情報・知識をもとに離着陸する必要のある有視界飛行方式での着陸が要求される。このため、日中しか空港は運用することができず、天候によってはこれらの国際線が到着できないこともある。

【バス】

バスはブータンの都市間輸送において最も使われる交通手段である。

市内バス

首都であるティンプー市と南東部に位置するプンツォリン市においては、ブータン郵政公社（Bhutan Postal Corporation）によって市内バスが運行されている。

ティンプー市内においては、市内バス路線は 8 系統あり、そのすべてが市内中心部にある市内バスターミナルを拠点として運行している。運行頻度としては、最も運行本数の多い 2 系統で 30 本

（ラッシュ時15分間隔、閑散時30分～1時間間隔、7時から19時半まで）、最も少ない6，7，8系統で10本（1時間間隔、7時から19時まで）であり、どの系統も20時にはバスターミナルに到着して運行を終了する。時刻表は市内バスターミナルにある張り紙もしくはインターネット上で調べることになり、各バス停留所においては「City Bus Stop」と書かれた標識があるのみである。

バスの車両としてはブータンのバス車両として一般的なマイクロバスが用いられているが、その一方で2012年10月に中国製のノンステップバスが新造・導入された。これにより、都市交通の近代化は図られる見通しとなっており、将来的には日本のようにプリペイドカードを用いて乗車することが出来るような構想も持たれている。また、他の都市においても市内バスを運航するという方針も同様に郵政公社によって示されている。

都市間バス

都市間バスは長距離旅行の一般的な交通手段であり、首都から地方都市だけではなく、地方都市間も結ぶ役割を果たしている。主要な都市にはバスターミナルや、都市間バスが止まる停留所が存在する。都市間バスを営む事業者は10社程度あり、それぞれが路線を開設して運行している。

ティンプー市内においては、ティンプーバスターミナルがあり、そこから多くの都市間バスが出発している。特にティンプーから中部のブムタン、南部のゲレフ、南東部のプンツォリン、空港のあるパロへのバスの本数は多い。

長距離バスに用いられる車種がマイクロバスであるため、座席間隔などは狭く、居住性に富むとはあまりいえない。

このほか、南東部のプンツォリンからは週に2便インドのコルカタまでのバスが走る。

タクシー

都市間バスと同様にタクシーも都市間の交通手段として用いられる。特に、幹線道路から離れたところでは都市間バスも走らないために、公共の交通手段はタクシーのみに限られる。このため、小さな町でもタクシーは数台はあるのが特徴である。

ブータンのタクシーは、日本と同様に一台をチャーターする形で利用することも出来るが、同じ方面に行く人々を募って相乗りでいく方法が一般的である。ティンプーから地方に行く場合は市内にあるタクシー乗り場に行き、乗り合いタクシーを募ることになる。

自家用車

ブータンの自家用車普及率はあまり高いとは言えないが、近年の経済成長により首都ティンプー、西部パロを中心として自家用車の普及率は上がりつつある。しかしながら日本の都市部と比べると車の数は圧倒的に少なく、町中や幹線道路において多く見られる程度である。地方の農村部に行くと車の数はさらに減少し、富裕層や業務上必要な人々、またタクシードライバーが自らの営業のために車を持っている程度となる。

主に使われている車のメーカーとしてはトヨタやスズキのインドの合弁会社であるマルチ・スズキ・インディア、韓国のヒュンダイが挙げられ、ブータン国内には生産拠点がないためすべてがインドからの輸入となっている。このほか、タタ社やマヒンドラ社といったインドのメーカーによるくるもしばしば見られる。車種は軽自動車が多く、観光業者など悪路を頻繁に走る必要性のあるところはランドクルーザーなどの四輪駆動車を持つ傾向にある。現地にて車について話を聞いた際には、日本車は性能がよく寿命が長い一方で値段が高い。その他の国の製品の場合、値段が安いが性能面では不安が残る、マルチ・スズキがもっとも庶民の車としてよく利用されているとのことであった。　（担当：谷 悠一郎）

【参考文献】

1）Bhutan Postal Corporation Ltd. | City Bus, http://www.bhutanpost.com.bt/index.php?id=71（2013年3月30日閲覧）

2）15 new city buses for Thimphu Thromde|BBS, http://www.bbs.bt/news/?p=18283（2013年3月30日閲覧）

3）Thimphu Thromde Bus Service Route Network Plan, http://www.rsta.gov.bt/download/CityBusNetwork.pdf（2013年3月30日閲覧）

写真 6　2012 年に新造されたノンステップバス

写真 7　ティンプー市内バスターミナルで各系統が待機する

写真 8　長距離バスに荷物をつみこみ出発を待つ人々

写真 9　ポプジカで見たタクシー。7 人ほどの家族が 1 台のタクシーに乗っていた。

写真 10　ティンプー市内で見た車。これはインドのマヒンドラ社製である。

7. 自然

【ブータンの気候と動植物】

ブータンで確認されている動植物数は、東ヒマラヤ固有種の 60 %を有し、哺乳類 166 種、鳥類 770 種、植物 5446 種が確認されている。このような多様な種の生息は、ブータン国内の高度差のために生じる多様な環境に由来している。ブータンは北にヒマラヤの 7000 m 級の山々が連なる一方、南のインドとの国境付近では標高が 200 m ほどになる（首都ティンプーは標高 2320 m、旅程を通じての滞在地点は標高 2000-3000 m）。その規格外の高度差が、九州ほどの大きさしかない国に、熱帯雨林から雪山まで含む多様な環境を生み出し、多様な生物を育んでいる。今回の旅程でも、森林限界を越えた裸地から針葉樹林、照葉樹林と観察す

ることができた。照葉樹林帯ではブナ科の樹木が多かった。木がまばらで下草が何も生えていない植生も見られた。牛の放牧、山火事、人々の薪炭材の利用や高山の厳しい環境などが原因だろう。美しい花もブータンの大きな魅力の一つである。標高 3000 m 付近ではシャクナゲがいたるところに分布していた。また、サルオガセやヤドリギといった着生植物や寄生植物も多く見られた。

現地ガイドによるとブータンは亜熱帯にあたるが、ブータン到着後、パロ空港には雪が積もっていた。ブータンの位置は北緯 26 度と沖縄と同じくらいであるが、高標高のため、夜は極度に冷え込む。しかし、昼は日差しが強く、暑い。この一日の中の寒暖の差は高山地域ゆえの乾燥で空気中に水分が少ないことが原因だろう。私たちがブータンを訪れたのは 1 月で、寒さ対策にダウンの中にセーターと上着を着ていたが、日中は T シャツ 1 枚で大丈夫な日もあった。

ターキンは、ウシとヤクの間のような外見の生物で、ブータンの国獣である（写真 11）。かつて、動物園では、多くの種類の動物を飼育していたが、チベット仏教の精神に反するということで、多くの動物たちが野に返された。しかし、ターキンだけは人に慣れすぎてしまったため、未だに施設で保護されており、広いフェンスに囲まれた場所に 20 頭ほどで暮らしている。

ポプジカでは、オグロヅルを観察することができた。オグロヅルはヒマラヤの大山脈を越えて渡りをすることで有名である。ポプジカの大きな湿地帯に、50 羽近い群れが地面をついばみ、餌をとっていた。北海道のタンチョウに似ているが、首全体が黒くなっているのがタンチョウと違う。ポプジカは電気よりツルをとった村として有名である。電気を村に通せば、電線を張らなければならない。しかし、電線を張るとツルが引っ掛かって死んでしまうことがある。そのため、村民はツルのために電気をあきらめたのである。もっとも、今は電線を地下に通すことで電気を通している。ポプジカにはオグロヅルの観察所があり、環境教育に関する展示もしていた。また、ターキンやオグロヅルの他にも、バスで移動中にグレイラングール、サルやヤクに遭遇することが出来た。田舎では、猛禽類やキジが現れ、豊かな自然が残っていることを感じさせた。

【ブータンの暮らしの中の自然と開発】

滞在中に民家を訪問し、サムテガンでの暮らしを観察した。いまだに山から薪炭材を取ってきており、かまどにまきをくべ暖をとっている。サムテガンで、道を歩いていると、村人が何人か集まり日常使う落葉落枝を集めていた。大量の葉が牛舎の横に積み上げられていたので、たずねてみると、牛舎の底に敷いたあと、糞尿混じりになった葉を畑にまくのだそうだ。畑の肥料にするとともに牛舎の清掃も兼ねている。子供たちの遊び道具も自然から調達しており、木の枝やつるを用いてアーチェリーの道具を自作して遊んでいた。

ブータンの森林被覆率は 72.5％で、木材は完全に自給している。森林を過度に破壊しないように、森林の調査を行い、切る木を選択して伐採する択伐を行っている。ブータンは環境破壊がまだ問題

写真 11　ターキン（ブータン王国の国獣）

写真 12　サムテガンの農村風景

化する前の国だが、他国を教訓にし、森林を破壊しないような政策をとっているのである。環境教育も盛んで、植林も行われている。

現地の若者が言った。「今の先進国のような発展は間違っている、ブータンは独自の発展のしかたを探らなければならない」。先進国の、環境を犠牲にした発展に警鐘を鳴らす意見に驚かされた。豊かな自然と調和可能な無理のない発展と、自然の大切さを忘れない暮らしを、ブータンがいつまでも続けてくれることを切に願う（写真 12）。

（担当：丸山晃央）

【参考文献】

1） 中尾佐助「秘境ブータン」岩波書店，2011 年
2） 平山修一「現代ブータンを知るための 60 章」明石書店，2005 年

8. ブータンの食

【穀物、野菜】

首都ティンプーでは、毎週日曜に野菜市場が開かれる。この数十年の日本からの技術指導（西岡氏）によって、国内でもかなり生産されるようになった。市場には、米（赤米）、トウモロコシ、各種の唐辛子（エマ）、豊富に自生するキノコ（シャモ）、インゲン豆、キャベツ、トマト、キュウリ、ズッキーニ、タマネギ、カリフラワー、ニンジン、ナスなど、日本と同じような野菜が所狭しと並ぶ。少し特殊なものとしてマツタケ（サンゲシャモ）がある。果物も豊富で、リンゴ、オレンジ、バナナ、柑橘類などを見かける。これらはブータンの低緯度（南）地帯で生産されている。国内産業生産額の 7 割が農業、残り 3 割が観光と水力発電（インド向けの売電）であることからしても、農業が重要な産業となっており、野菜、穀物中心の豊富な品揃えにも納得が行く。

【獣肉、魚肉】

イスラムやインドのように、豚肉や牛肉を禁ずるわけでもないが、宗教上の理由で基本的に殺生禁断の国である。ブータン人は牛、豚、鳥、魚などを屠殺して食肉にすることは禁じられている。唯一、自然死した家畜は食べても良い。しかし、生肉として食べることはなく、どの家庭に行っても、牛肉や豚肉の脂身を薄くスライスして軒下に干して乾燥肉として保存し、これを料理に使う。自然死以外の獣肉は、インドなど、外国で屠殺されたものであれば問題ないようであるが、普通の家庭では全く見かけなかった。魚釣りも禁じられている。従って、日本のような生の魚などは全くない。商店には、輸入された干し魚が売られている。

【乳製品】

宗教上の理由から殺生禁断とされており、重要なタンパク源となるのが乳製品である。ほとんどの農家は、牛、ヤギを飼っており、これから取れる牛乳などから、チーズ（ダツィ）、バターを作っている。料理の主な材料はこれらの乳製品だ。後述する乾燥チーズもある。

【嗜好品】

タバコは国家レベルで禁止されている（2004 年 12 月よりタバコの製造販売が全面禁止）。代わりに伝統的なドマと言われる噛みタバコのようなものがある。これはキンマの葉で、ビンロウジュの実と石灰少々を包み、これをゆっくり時間をかけて噛むもので、唾液が赤く染まる。道路には、吐き捨てた赤いシミが無数に見られる。タバコ同様、軽い興奮作用があるらしい。店で売っているお菓子類は、ほとんどがインド、タイからの輸入で、日本の製品も見かける。サムテガンの家庭を訪問した際、まず例外なく出されるのがザウ（米のポン菓子のようなもの）とミルクティー（ガジャ）である。チベット風のマテ茶（バター茶）は滅多に出てくることはない。

乾燥したチーズ（水牛の乳）もあちこちで売られている。口に入れて、時間をかけて食べるのだが、無味で非常に硬く、丸一日たっても融けることはない。

酒類は、各家庭で醸造することを許されている（販売は出来ない）。大麦、米、トウモロコシなどを原料とする。発酵酒（シンチャン）は、アルコール度数 5％程度でビール程度。これを簡単な装置で蒸留したものがアラと呼ばれ、アルコール度数 20 ～ 30％。暖めて卵を入れて、ちょうど卵酒のようにして飲む事が多い。地ビールも販売されている（ドゥルク 11000、レッドパンダ）。

【料理】

主食は米（赤米）である。非常に沢山食べる。平均的な男性で、1日1kg食べると言われる。村の小さな子供が、ほとんど副食なしに、ご飯だけを食べているのを見かけた。朝食に供されるのが、そば粉で作ったパンケーキ（クレ）。

国民食と言われるのが、青唐辛子をチーズと炒め煮にした「エマダツィ」である。ほとんど毎食出ると言って過言ではない。非常に辛いが、これを「野菜」として沢山食べる。ブータン国営ドゥルク航空の機内食にも出てくるほどである。

人気の高いのが、チベット風餃子（モモ）。中国、日本の餃子と異なり、ひき肉を必ずしも使わない。具は野菜とチーズが主流。基本は蒸したもので、油で揚げたものもある。トウバンジャンのような唐辛子調味料（エゼ）をたっぷりつけて食べる。

ブータンの食生活は、コメを主食とし、副食は野菜（主として唐辛子）と乳製品、鶏卵、少量の肉という質素なものである（写真13）。農村部の人たちは、栄養不足気味で、子供達に肥満は見かけなかった。また、女性の貧血が多いと聞く。今後の経済発展で、栄養状態が好転することを期待したい。（担当：吉原博幸）

【参考文献】

1）　ブータンの文化，ウィキペディア
2）　地球の歩き方，ブータン 2012 ～ 2013 年版，ダイヤモンド社

写真13　米と野菜中心の食生活（ホテルの食事）。一般の人々の食事はこれよりもっと質素。

9. ブータンの人々と言葉

ブータンは多民族･多言語国家である。それは、旅行者であるわたしたちにも、視覚・聴覚に飛び込んでくる。さまざまな地域の人が行き交う空港や首都ティンプーでは、華やかな色使いの服を身にまとった東部の人々や、ブータンの民族衣装ではなく洋服を着た彫りの深いネパール系の人々を見かけることが出来た。

【背景と概要】

ブータン人の主要民族は、チベット系のブータン人である。その他にネパール系ブータン人や、東部のツァンラ人などがいる。特に、ネパール系ブータン人は、19世紀末ごろから移住してきた人々で、1980年代には人口の30-40%を占めていた。

1989年の伝統保護のための布告では、「民族衣装の着用、国語ゾンカの習得、伝統的礼儀作法の遵守」が「ブータン人」の義務とされている。現在、ブータン政府は宗教や民族別の人口比率を公表していないものの、複数の民族が共存していることは周知の事実である。

ブータンの国語はゾンカ語であり、学校の中ではゾンカ語と英語、初等教育に限って地方の言語が使用されている。その他に、ブータン政府の観光局のホームページによると、国内では19以上の「方言（dialects）」が話されており、「谷を超えるごとに言葉が異なる」と言われる。主要な言語としては、東ブータンのツァンラで話されているツァンラカ語や、南ブータンで話されているロサンカ語などがあげられる。また、中央ブータンのケン族はケン語を話し、ブムタン族はブムタン語を話している［ブータン政府観光局 2013］。さらに、ブロカト語やゴンデュク語のように、消滅を危惧されるほど母語話者の少ない言語もある [4]。下記はブータンで話されている言語の一覧である（表3）。

この表のうち、△の印の着いている9つの言語は、高齢者は使用しているが、若年層が使用しない消滅危機言語とされている。ゾンカ語を含めたその他の10の言語も、若年層が学校や職場といった家の外では使用しない言語として、程度の低いものの消滅の危機にある言語とされている。また、表からわかるように、いくつかの言語はインドのアルナーチャル・プラデーシュや、アッサム、中

表3　ブータンの言語

言語名	地域	話者人口
Dzongkha	西ブータン	160000
Tshangla	東ブータン、インド、中国	138000
Cuona Menba	ブータン、中国、インド	50000
Bumthang	ブムタン	30000
Lepcha△	サムチ県、インド、ネパール	30000
Cho-ca-nga-ca-kha△	モンガル県、ルエンツェ県	20000
Dzala	タシガン県、ルエンツェ県	15000
Kurtöp	ルエンツェ県、クル川西岸	10000
Lakha△	ワンディ・ポダン県	8000
Brokpa△	サクテン谷、ワンディ・ポダン県	5000
Kheng	ケン地区，シェムガン県、ブムタン南部	4000
Lhokpu△	サムチ県	2500
Chali△	モンガル北部、クル川東岸	1000
Dakpa△	タシガン県、インド	1000
Gongduk	モンガル地区、クル川	1000
Nyenkha	マンデ川	1000
Black Mountain△	中央	500
Brokkat△	ブムタン	300
Nupbikha	ブムタン県、トンサ	不明

［UNESCO 2013］をもとに筆者作成。話者人口は1991年当時。

国でも話されている。これらは主に非チベット系の言語である。

わたしたちが覚えた僅かなゾンカ語はどこでも通じたし、子どもは皆英語をある程度理解していたので、旅行中にさほど不便をすることはなかった。

ゾンカ語はチベット語の南部方言であり、チベット文字を使って表記される。近年になって文法書や辞書が整えられ、表記が統一された。この言語は、行政を司る「王宮（ゾン）の言語（カ）」という意味で、国内では西部を中心に話されていたが、1980年代に国語として制定された。

「ブータン人」という国民の創出と、ゾンカ語政策には深い関係がある。ゾンカ語は、もともと西部で話されてきた言語である。これは、西部のチベット系ブータンの社会と文化が「ブータン的」と認識され、ブータン国家の核として「ブータン文化・ブータン社会」の特性を表象する形となっている。すでに述べたように、1989年の布告により、ゾンカ語は単なる象徴や知識ではなく、具体的に実践し、身に付けることが求められるようになった［宮本 2011: 404］。

一方で、国内における英語の威力は無視出来るものではない。英語は教育言語として広く国民に浸透しており、「すべての教科をゾンカ語で教えたくても教えられない」状態が続いている。このように、ブータンでは国語であるゾンカ語、若年層を中心に浸透度の極めて高い英語、そして消滅危機にさらされた地方語という、三段の言語層が複雑に折り重なっている様子がわかった。

【京都大学第10次ブータン訪問団として体感したブータンの言語】

ゾンカ語の挨拶程度しかままならなかった筆者には、ゾンカ語以外のブータンの言語を聞き分けることはとても出来なかった。ガイドや商店主とは英語でコミュニケーションを図っていた。しかし、時々耳慣れた言葉に出くわすことがあった。ヒンディー語である。

ティンプーでゾンカ語の辞書を購入しようと書

写真 14　道路標識

籍を探していたところ、訛りのあるヒンディー語の会話が耳に飛び込んできた。店員のブータン人女性が積極的にヒンディー語で声をかけると、男性インド人客は嬉しそうに応対をしていた。女性店員は、衛星テレビで流れるヒンディー語映画や客との会話を通じてヒンディー語を習得したのであろう。彼女のヒンディー語には、インド人や西洋人の使うヒンディー語とも異なるアクセントがあった。ところどころ文法の誤りもあり、語彙も乏しかったが、インド人の男性客とテンポを崩さずに会話ができているところをみると、ヒンディー語を使う機会はよくあるのであろう。

この書店のあった地区では、他にも多くのインド系、ネパール系の男性を見かけた。彼らはジーンズにシャツの洋装をしており、街中の広場や商店の出先にたむろしていた。

訪問団の泊まったホテルでも、テレビがつくところならどこでもインドのチャンネルが放送されていた。ヒンディー語で制作された、インド人向けの放送を衛星で受信しているのである。サンスクリット語の多いヒンディー語のニュースであったり、ボリウッド映画であったり、ヒンディー語版の「ドラえもん」を始めとするアニメが、ゾンカ語への字幕や吹き替えなしで受信できた。

それに対してゾンカ語のチャンネルの基本は、ニュースと、ドラマなどの娯楽番組の二本立てらしい。しかし、コンテンツ不足なのか、国のプロモーションビデオのような映像がたびたび放送されており、小学生の歌のコンテストの様子が繰り返し流されていた。

また、ワンデュポダン新市街地でも、インド系の商店や住民を多く見かけた。近くでダムの大規模な工事が行われているため、急激にインド系の労働者・移民が集まっているという。

彼らの多くは、労働者としてブータンに出稼ぎに来ている男性である。道路工事やビルの建設工事といった肉体労働はブータン人に忌避される傾向にあり、これらの多くをインドから来た出稼ぎ労働者が担っていた。インド人にとっては、母国の数倍とはいかないものの良い賃金で、食事や住居の保証された手近な出稼ぎ先がブータンである。

ブータン人が「あそこにはインド人が多い」というとき、それは出稼ぎ労働者を意識しているのか、言葉尻に歓迎している様子は感じられなかった。それでも、彼らを多く受け入れている都市部では、当然インド人相手の商売が成り立っており、先ほどの店員のように、ヒンディー語を積極的に学ぶケースもあるのであろう。

孫世代に代表される進んだ英語教育は、国際化の流れにおける強みでもあり、一方で国語教育がおろそかにされるという危惧もある。ゾンカ語、地方語、ヒンディー語、英語といった多言語構造は、この国の豊かな文化を支える土壌でもあり、新世代の「ブータン人」のバランスが問われている。　（担当：須永恵美子）

【参考文献】

1）　ブータン政府観光局：ブータン政府観光局ホームページ , http://www.travel-to-bhutan.jp/, 2013 年（2013 年 8 月 2 日閲覧）
2）　宮本万里：『自然保護をめぐる文化の政治―ブータン牧畜民の生活・信仰・環境政策―』, 風響社，2009 年
3）　宮本万里：「仏教王国ブータン」のゆくえ―民主化の中の選挙と仏教僧，『南アジアの文化と社会を読み解く』，慶應義塾大学東アジア研究所，397-434, 2011 年
4）　UNESCO: UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger, http://www.unesco.org/culture/languages-atlas/, 2013 年（2013 年 8 月 2 日閲覧）

10. 歴史と文化

私たちは行く先々の寺院で、華麗な仏像と仏画の数々に息をのんだ。そこに描かれたチベット仏教の聖者たちは、ブータン人の篤い帰依の対象であり、精神的支柱である。ブータン人の「幸福感」を根底から支えるものの一つは、この聖者たちの加護への揺るぎない信頼であると感じた。そこでこの項では、聖者たちの中でも別格の存在である二人に関して見聞した知識や感想を述べ、それによってブータンの歴史と文化について垣間見たことをまとめたい。その二人とは、グル･リンポチェとシャプドゥン・ンガワン・ナムギェルである。

【グル・リンポチェ】

チベット仏教の開祖であるグル・リンポチェはインド人の高僧で、インドで生まれた仏教をチベットや他のヒマラヤ地域に伝えた。ブータンへは 8 世紀後半に、グル・リンポチェによって仏教がもたらされたと考えられている。ブータン人はこの聖人を Second Buddha として篤く崇拝している。グルとは「師」、リンポチェとは「転生仏（生き仏）」の意味で、単に「グル」と言う場合もこの聖人を指す。

今回の訪問で訪れたすべての寺院で、グル・リンポチェは本尊あるいは脇侍として必ず祀られていたが、中でもパロ郊外のタクツァン僧院はグルととりわけ深い所縁を持つ。私たちは訪問の最終日の朝、空港へ向かうまでの限られた時間に、一目だけでも見たいとタクツァン寺院へ車を走らせた。

タクツァンは、グル・リンポチェが初めてブータンへ飛来した時に着地した場所である。グル・リンポチェは八変化をもって布教をおこなったとされ、土着の悪霊たちと戦う際には特に獰猛な姿に変身した。この地へ飛来した時、グル・リンポチェはその獰猛な姿で虎の背中にまたがっていた。この事に由来して、この聖地はタクツァンすなわち「虎の巣」と呼ばれるようになった。17 世紀に時のデシ（摂政）によって、この聖地にタクツァン僧院が建立された。1998 年の火災により全焼したが、本尊であるグル・リンポチェの像だけは不思議に無事であった。僧院を再建する際に本尊の位置を動かそうと試みたところ、突然雷が轟いた。元の位置に戻すと空は静まり、再度動かそうとするとまた雷が轟いた。人々はそのあらたかな霊験を畏れ敬い、本尊は元の位置のまま鎮座することとなった。

【シャプドゥン・ンガワン・ナムギェル】

シャプドゥン・ンガワン・ナムギェル（1594 ～ 1651）はドゥク派の転生仏とされ、ブータンの「建国の父」として崇められている。本名はンガワン・ナムギェルであり、シャプドゥンは称号である（以下「シャプドゥン」と書く場合は、ンガワン・ナムギェル本人を指す）。

シャプドゥンはチベットにあるドゥク派本山の座主であったが、チベット国内で起こった仏教諸派の激しい政権闘争から逃れるため、1616 年西ブータンへ亡命した。シャプドゥンは卓越した人格と政治力を発揮して、ブータン各地にゾンを建立し、それらを各地域の拠点として地域間のネットワークを形成した。それと同時に、国内反対勢力を鎮圧し、チベット軍やモンゴル軍の侵攻も撃退した。このようにして、群雄割拠だったブータンをついにひとつの国家にまとめ上げ、ドゥク派を国教とする「ドゥク・ユル（雲龍の国）」を誕生させた。ンガワン・ナムギェルの死後は、代々の化身がシャプドゥンの称号を引き継いできた。この歴代シャプドゥンを、宗教界を統括するジェ・ケンポ（大僧正）と世俗界を統治するデシ（摂政）の二人が補佐する国家体制が、1907 年のワンチュック王朝成立まで続いた。

今回の訪問では、シャプドゥンと所縁の深いゾンのうち 5 つを拝観または眺望することができた。タシチョゾン、シムトカゾン、ワンデュポダンゾン、プナカゾン、ドゥゲゾンである。ここでは、実際に内部を拝観できたタシチョゾンとプナカゾンについて述べる。

タシチョゾンはティンプー市内にあり、私たちが訪れた最初のゾンである。周囲にはのどかで美しい棚田が広がっている。このゾンは国王のオフィスであり、国教ドゥク派の総本山でもある。建立されたのはシャプドゥンがやって来る前だったが、シャプドゥンが「タシチョゾン（最も栄光あるゾン）」と名付けた。講堂の中央には大きな釈迦如来像が、その右手にグル･リンポチェ像が、左手にシャプドゥン像が祀られている。

プナカゾンへは、ワンデュポダンに滞在した時

に訪れた。ポチュとモチュという二つの川の合流点に堂々とそびえるこのゾンは、1637年にシャプドゥンがシムトカゾンに続いて2番目に建立したものであり、シャプドゥンが他界したのもこのゾンの中であった。プナカゾンは、グル・リンポチェの予言が見事に現実化されたゾンである。グル・リンポチェは8世紀に「ナムギェルという名の若い男が、象の眠っているような形の山にやって来て、象の鼻の先端の位置にゾンを建てるだろう」と予言していたという。そして、プナカゾンとその後ろの山は、まさしくその通りに見えるのである。モチュ川にかかる橋を渡ってすぐの場所にあるゾンチュンと呼ばれる寺院は、シャプドゥンが来る約300年前に、あるインド人聖者により建立された。ここには、次のような逸話がある。シャプドゥンはゾン建設に取りかかるにあたって、ある大工にゾンチュンの仏像の前で眠るよう命じた。その晩彼は夢の中でゾンの完成した姿を鮮明に見た。そして、その夢の通りに建設してできたのが、このプナカゾンである。ゾンの講堂の近くに、マチェ・ラカン（「秘密の寺」の意）がある。この堂内にはシャプドゥンのミイラが安置してあるとされ、ゾンの中で最も神聖な場所である。シャプドゥンは1651年に他界したが、その死を公表すれば新生国家の不安定要因になるとの危惧から、事実は50年以上も内密にされた。一般民衆に対しては、シャプドゥンは瞑想のために籠っているのだと告げられていた。なおマチェ・ラカンの中に足を踏み入れることが許されているのは、現国王、前国王、大僧正、および2名の世話係の計5名だけで、それ以外は誰一人として中に入ることは許されない。国王も大僧正も就任後すぐにこの御堂を参拝し、祈願の儀式をおこなうのだそうだ。　（担当：加畑理咲子）

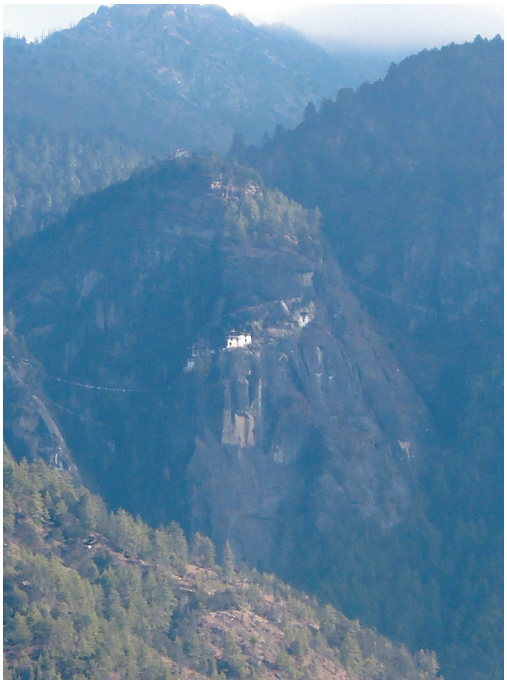

写真 15　タクツァン僧院を望む

写真 16　プナカゾン

【参考文献】

1）「地球の歩き方 12 ～ 13 ブータン」ダイヤモンド社
2）「幸福大国ブータン」ドルジェ・ワンモ・ワンチュック著，今枝由郎訳，NHK 出版

11. おわりに

ヒマラヤに憧れを持つ私にとって、ブータンはいつか訪れたい国だった。ひょんな幸運から第2次隊で訪問する機会を得たが、今から思えば、あのときはサムテガントレッキングコースを歩いたのだった。今回10回めとなった派遣団であるが、日程が少し長めになり滞在型となった。一つのところに滞在して、村人とじっくり交流するというのが目的だ。フィールドワークに慣れているメンバーだったからか、皆それぞれの視点から地域の方々と交流して帰ってくることができた。現在で

も学生さんとキャンプ地付近に住む住民とが文通するなどの交流が続いている。また、この夏、サムテガン BHU の HA である Rinzin 氏が来日された際にもメンバーと再会を果たした。今後もこの出会いを通じて交流が続くことを願っている。

最後に、このような機会をくださった京大ブータン友好プログラム世話人の先生方、坂本龍太先生に深謝いたします。　（担当：藤澤道子）